

審査の結果の要旨

佐々木 紳

1860年代の後半、オスマン帝国政府の政策に不満を持つ一群の若手官僚やジャーナリストはヨーロッパに亡命し、オスマン語の新聞という新しいメディアを活用して立憲運動を展開した。新オスマン人を自称した彼らの中で議会論を中心に政府批判を展開した論客の一人がナームク・ケマル(1840-88)であり、彼の果たした役割はトルコの憲政史上において高く評価されてきた。本論文は、新オスマン人研究におけるこれまでの近代化論的アプローチと最近のトルコにおけるイスラーム主義的アプローチの問題点を指摘し、これを乗り越えるために、思想史研究の観点から一次史料を徹底して読み込みながら、ナームク・ケマルの議会論に新たな光をあてようとする意欲的な研究である。

本論文は、まず1860年代に外国人居留民が刊行していたフランス語などの外字新聞や非ムスリム臣民が発行していた諸新聞に加えて『情勢通詞』などのオスマン語民間新聞が加わることによって、オスマン・ジャーナリズムとも言うべき、「開かれた」言論空間が生まれたことを指摘する。これは多宗教・多民族帝国を構成する諸集団間の緊張や摩擦が生じえる「公共的空間」であったが、それこそが新オスマン人の言論活動の舞台にほかならなかったという(第1章)。これはきわめて斬新な発想であり、今後の研究の深化が期待される。ついで、オスマン知識人による議会論が生まれた契機を、一連の改革を進める政府が1868年に開設した「国家評議会」に求め、この間の政治と思想との緊張に満ちた相互関係を明らかにする。これは新オスマン人運動の背景を明らかにする上で重要である(第2章)。これをふまえて、ロンドンで刊行された『自由』紙上でナームク・ケマルが展開した議会論を詳細に分析し、ヨーロッパの政治制度に通じていた彼が、立憲議会を論じるにあたっていかにイスラーム的言説を用いたかを明らかにする。とくに、イスラームと文明との調和、帝国内のムスリムと非ムスリム臣民との「平等」がはらむ問題性、そして治者と被治者との関係に関わる議論から見えてくる新オスマン人の「帝国意識」の分析は、本論文の重要な成果として評価することができる(第3章)。そして、同時代のイスタンブールの論壇ではポーランド人亡命者のハイレッティン・カルスキらによって「イスラーム抜き」の議会論が論議されていたことを明らかにする(第4章)。このようにして、本論文はナームク・ケマルの議会論をその論敵との対照によって相対化し、結果として彼の議論の特徴をおさえることに成功しているといえよう。

本論文はなおいくつか検討を要する点があるとはいえ、史料に裏打ちされた実証性と緻密な論理構成、明晰な文章を備えた完成度の高い論文である。よって、本審査委員会は本論文をもって博士(文学)の学位を授与するにふさわしいとの結論に至った。